

27AB-am004

児童を対象とした薬の適正使用テキストと体験実習による薬教育の評価

○齋藤 百枝美¹, 渡部 多真紀¹, 高橋 和子¹, 佐藤 典子¹, 松田 康子², 宮本 法子³,
栗原 順一¹ (¹帝京大薬, ²ひまわり薬局, ³東京薬大薬)

【目的】国民が医薬品を適正に使用することが出来るように、2012年から中学生の薬教育が始まったが、小学校の学習指導要領に薬教育は導入されていない。我々は小学生から、薬教育が必要と考え実践教育を行ってきたが、今回、オリジナルテキスト「くすりを使う時の12の約束」を用い、薬の適正使用の必要性について学ぶ「わくわくおくすり教室」を実施し、その評価・検討を行った。

【方法】小学3、4年生21名を対象として、2015年8月8日、9日、帝京大学薬学部実習室で「わくわくおくすり教室」を実施した。内容は講義、体験実習（手洗い、正しい目薬の使い方、外用剤はどこに使うか、胃と腸での薬の溶け方、カプセルを用いた実験、水以外の飲み物が薬に影響を与える実験、振り返り）の約2時間30分間で実施した。参加者に対し、事前4項目・事後5項目のアンケートを実施した。

【結果および考察】アンケート回収率は100%であった。事前の薬に対する認識では、「薬はたくさん飲んだら早くなおる」2名（9.5%）、「友達から薬をもらったことがある」1名（4.8%）、「薬を水なしで飲んだことがある」3名（14.3%）、「もし薬を1回のみ忘れてたら、2回分を一度に飲めばよい」2名（9.5%）など、誤った認識を持っている児童が認められた。事後の「わくわくおくすり教室」の理解度では全項目において99%以上の児童が5（よくわかった）又は4（わかった）と回答し、いずれの中央値も5であった。今後、薬を使う時に注意したいことでは86%以上の児童が全項目について注意したいと回答しており、誤った認識に関して改善が認められた。薬教育は健康に関する良い習慣が身に付く小学生から開始し、年齢に応じて体系的に行うことが望ましいと考える。